

7 翅つばさなき人にしあれば夜ふかく水に舟うけて月に遊べり

新井汎 (明治一六〜大正一四)

東京日本橋生まれ。信綱に入門、「心の花」入会。信綱の紹介で尾崎紅葉のもとで創作も行う。都市生活を静謐に詠う。『新井汎歌集』(昭和六年)の一首。翅があれば月まで行くのに、翅がないから水面の月で遊んでいる。飛翔へのあこがれを抱きつつ、視線は下に向かってるのが象徴的である。

(佐佐木定)

8 小鳥きてかたみにくちをふふみあふみちあふれたる愛のしづけさ

柳原白蓮

(明治一八〜昭和四二)

大正天皇の従妹に生まれ、九州の炭鉱王に嫁ぎ「筑紫の女王」と謳われた白蓮。この頃、出版された歌集『踏絵』では、愛のない結婚生活への嘆きが歌われていた。その後、夫のもとから出奔し、若き弁護士と結婚。二児に恵まれたが、長男は戦死を遂げる。戦後の白蓮は「悲母の会」を結成し反戦運動に尽力した。『地平線』(昭和三年)所収の掲出歌は、幾つもの深い悲しみをくぐり抜けた作者が到達した、静かに澄んだ境地を感じさせる。(清水)

9 この花は受胎じゅたいのすみしところなり雌蕊しずゐの根もとのふくらみを見よ

木下利玄

(明治一九〜大正一四)

何と肉感的で明るい歌だろう。結句「見よ」の命令形に、命の根源を発見しような心躍りが宿っている。本歌を収めた第二歌集『紅玉』(大正八年)で、利玄は次々に早世する子らへの哀切な挽歌を挿みながら、草木や山、海、人のいる風景などを果敢に写生した。対象に宿る命の描写に迫力と優しさがある。へうねり波たかまりあがり水底みそこめがけ重みまかせに倒れたるかもへ山鴉ころくのどをならしつゝ梢になけりこれは朴の木 (梅原)

10 捨てられてなほ咲く花のあはれさにまたとりあげて水あたへけり

九条武子

(明治二〇〜昭和三)

西本願寺大谷家の出身、天皇家とも姻戚の九条男爵に嫁いだ作者。布教活動に奔走する一方で、留学先から戻らぬ夫を待ち続けた。懊悩の日々にあつて自分が何者であるかを歌の形で問い続け、自らの生きる力に変えていった集積が、第一歌集『金鈴』(大正九年)である。古典の流れを汲む優美な歌や激しい感情を吐露する歌の間に、掲出歌のような儂いものに心を寄せる優しい歌が置かれ、ほつとさせられる。花は自分の姿でもあろう。(梅原)